

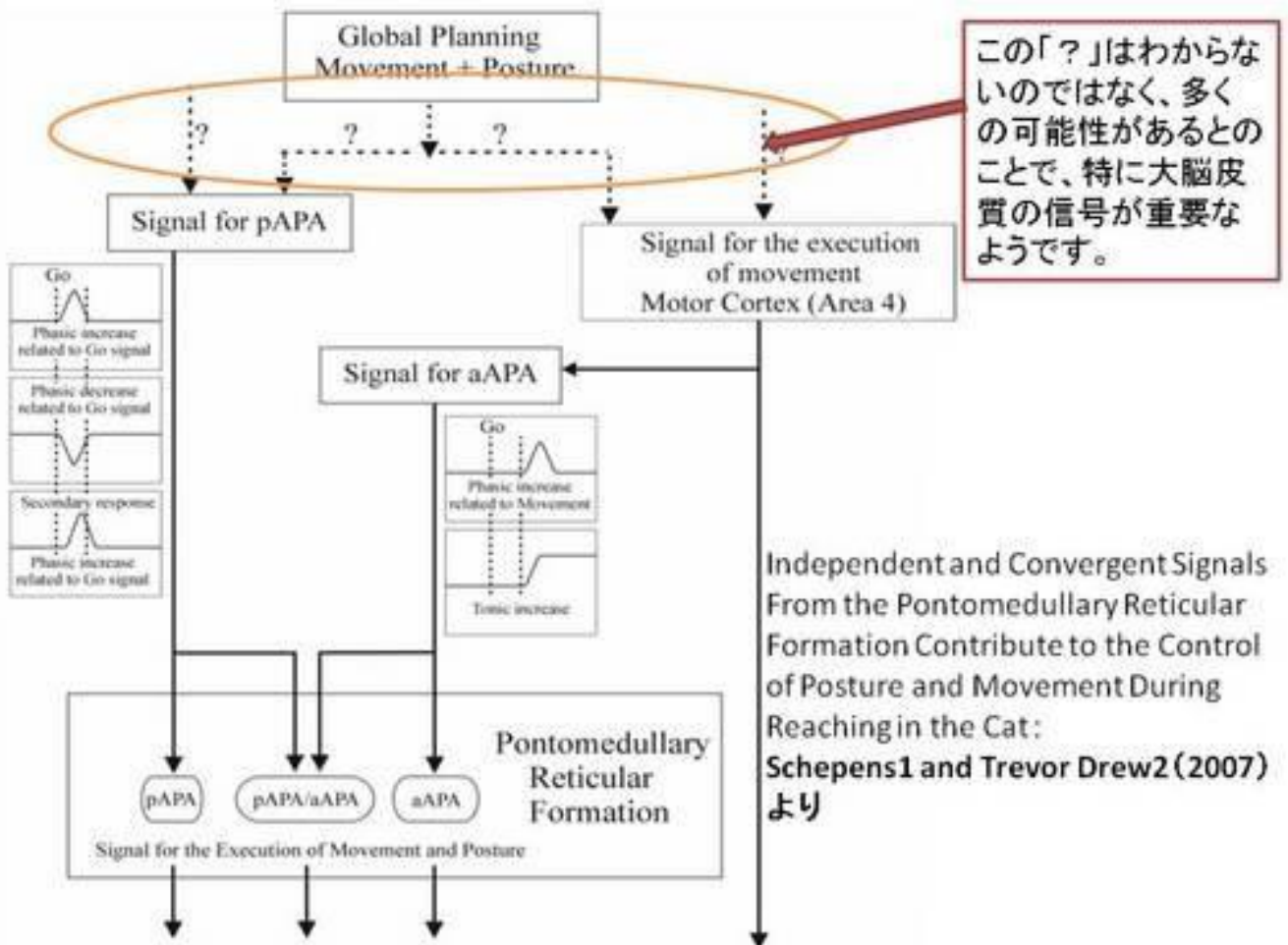
本文

運動への上位中枢の関与 随意運動時（歩行も含めた）上位中枢の関与です。

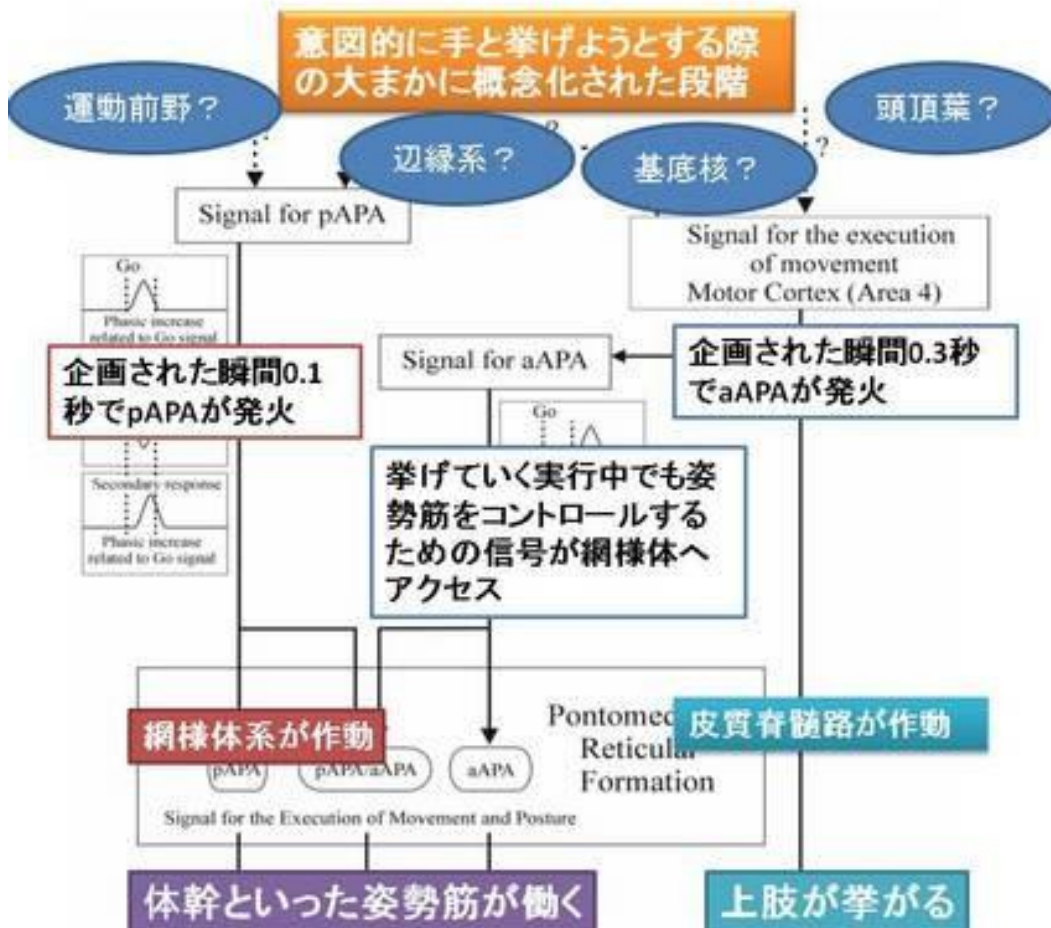
今回の話は随意運動のための皮質内の認知過程に焦点を当てているのではなく、その先の運動と姿勢との協調過程に焦点を当てた内容です。

まず最初に以下の図を出しました。最近（だいぶ昔）よくボバースの講習会でも紹介される schepens の図です。

これまで姿勢セットという言葉を生理学用語の APA と言い換え、姿勢セットのエビデンスを猫がネズミを捕獲する実験で提示された図で説明しています。



手を挙げる場合どのように考えるか？



患者さんは「？」の形成で失敗するようで、セラピーではこの「？」の部分をしっかり形成して適切な運動と姿勢の信号が発動できるようにすることが重要なようです。

歩行時も辺縁系や網様体系のスイッチが入って CPG が発火し、駆動したとしても、上位中枢の関与は完全にはなくならないと上記の図でも考えられます。

随意運動実行中(aAPA)の制御には、上記「？」の部分に当たる上位中枢のモニターが重要となります。